

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25500008

研究課題名(和文) 都市部及び農村地域における高齢者の孤立化に関する実証的・文献学的研究

研究課題名(英文) Demonstrative studies of the phenomenon of loneliness in elderly people in urban and rural communities

研究代表者

船木 祝 (FUNAKI, SHUKU)

札幌医科大学・医療人育成センター・准教授

研究者番号：60624921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：独居高齢者に関しては、自立した生活を強く意識していこうとする側面だけではなく、さまざまな交渉を通して紆余曲折を経ながら何とか現状に折り合いをつけていこうとする側面が注目されなくてはならない。独居高齢者はお互いの弱点も受け入れ合い、何でも気兼ねなく言い合えるような周囲との関係性を求めている。そうした高齢者が精神的に満足した生活を送るためには、自立能力を強調するだけではなく、人間の喪失、病気等による脆弱性を受け入れ合うような周囲のあり方が検討されるべきだと考える。

研究成果の概要(英文)：Elderly people living alone find themselves forced to try to accept their situations, which often includes the stress of having to cope with the loss of a loved one. It is important that they are able to find ways of deepening and improving both their self-relationships and relationships with others. The elderly seek interdependent human relations, which provide comfort and support for people in weak positions. This study considers the importance respect has in enhancing life satisfaction in the elderly, examining how it relates not only to the ethical principle of autonomy, but also to the principle of vulnerability.

研究分野：哲学・倫理学 生命倫理学

キーワード：独居高齢者 自立 脆弱性 人間関係 相互依存 サクセスフルエイジング 孤独 スティグマ

1. 研究開始当初の背景

総務省の「平成 22 年国勢調査」によると、総人口に占める 65 歳以上人口の割合（高齢化率）は 23%で、そのうちの 16.4%が一人暮らしとなっている。内閣府の「平成 17 年度世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査」によれば、一人暮らし世帯の 7.2%が「心配ごとの相談相手がいない」、11.2%が「近所づきあいはない」となっている。このように、独居高齢者問題は、今後一層深刻なものになると考えられる。

内閣府の「平成 23 年度高齢者の経済生活に関する意識調査結果」によると、60 歳以上の高齢者の会話の頻度に関して、「毎日」が、単身世帯を除けば 9 割以上であるが、単身世帯では 75.8%にとどまり、「2 日～3 日に 1 回」とする人も 14.8%いる。頼れる人の存在の有無に関しては、「同居の家族・親族」が 77.2%と最も高く、単身世帯では「別居の家族・親族」が 66.0%に達し、「近所のひと」、「友人」、「その他」、「いない」とする割合も他の家族形態に比べて高くなっている。生きがいを感じることに 대해서는、配偶者がある人が 84.5%で高く、単身世帯では 73.0%で低い。このように、単身世帯は他の家族形態に比べ、相対的に会話の頻度が少なく、頼れる人を別居の家族・親族や他の人たちに見出す傾向が強く、生きがいを感じることも少ないことがわかる。

北海道の 2010 年の 65 歳以上の人口の割合（高齢化率）は、総務省「平成 22 年国勢調査」によると 24.7%、札幌市が 20.5%、留萌市が 28.2%である。全国平均の 23%に対して、札幌市は高齢化率が低いが、留萌市は大幅に上回っている。留萌市は約 3 割が 65 歳以上の高齢者となっている。札幌市では、2012 年 1 月病死した姉と障がいを抱えた妹の孤立死という痛ましい事件も報じられている。札幌市保健福祉局の調査によれば、2012 年 4 月から 6 月の 3 か月で 43 人の生活保護者が孤立死している。ここには都市部での社会的弱者の孤立化という問題が浮かび上がってくる。留萌市は北海道西北部に位置する留萌地域の中心都市である。その基幹産業は水産加工であり、市の中心部は商店街、南部には官公庁、学校、住宅地が広がっている。東西を走る留萌川を中心に両翼には平原、丘陵が続く。留萌市 NPO 法人るもいコホートピアによる保健福祉アンケート（平成 20 年度）によれば、65 歳以上の高齢者の 11.9%が一人暮らしになっている。このアンケートの自由回答法の質問事項に対しては、「独居老人の寂しさ、不安、精神面のケア等、住民同士が助け合って暮らせるよう見本となることを導入してほしい」との訴えがある。ここにも高齢者の孤立化問題が認められる。

このような独居高齢者の日々の生活の精神面、及び社会面における経験をさらに掘り下げて調査する必要があると考える。

2. 研究の目的

近年増加しつつある高齢者の孤独死を背景に、孤立化問題に関し、実証的及び文献学的な研究方法の融合により、これまで見過ごされてきた独居高齢者の外面及び内面に關わる掘り下げられた問題点を明らかにする。それには、高齢者の孤立化問題に関して実態を踏まえたうえで、倫理的・法的・社会的考察を具体的に必要性がある。倫理的には人間関係という側面から、法的には制度、社会的には周囲のサポートという側面から問題点があることが指摘できる。

本研究は、北海道札幌市（都市部）及び留萌市（農村地域）在住の独居高齢者に関する実態調査をすることにより、高齢者の精神的・社会的孤立状態を明らかにし、調査結果に国内外の文献学的研究を投入することで、高齢者の孤立化問題に関する深化した考察をすることを旨とする。

3. 研究の方法

(1) インタビュー調査

研究デザインは質的記述的研究である。研究参加者は、札幌市及び留萌市在住の 65 歳以上の独居高齢者男女各 6 名計 12 名を対象とする。北海道勤医協家庭医療センター月寒ファミリークリニックに通う患者、NPO 法人るもいコホートピア「るもい健康の駅」の利用者各 6 名ずつ計 12 名である。

北海道勤医協家庭医療センター（寺田豊センター長）月寒ファミリークリニック、及び NPO 法人るもいコホートピア（小海康夫理事長）「るもい健康の駅」から紹介していただいた独居高齢者に、調査参加協力依頼書を郵送し、協力の意思を確認した。個別訪問もしくは調査対象者の希望する場所（居宅や公共スペースなど）に、研究者 2 名が紹介看護師、介護支援専門員、もしくは病院職員とともに訪れ、調査の目的の説明をしたうえで、研究調査への参加同意書を得た。同意が得られた方に対してのみ、一人暮らしの生活における精神的状況についてのインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。面接内容は研究参加者の了承を得て録音した。面接時間は平均 62 分（38 分～83 分）であった。

インタビューは、独居年数、一人暮らしになった経緯、日課、一人暮らしの中で感じていること、周囲との関係、地域についての思い、日々の暮らしで支えになっていること、辛いときに必要なサポート、周囲や社会への訴え、今後の思いなどについて語っていただいた。また相互的な話の流れで、自由に語っていただいた。

面接で得られた録音テープから逐語録を作成し、まず、逐語録を繰り返し読み返し、語られている内容をコード化した。次に共通内容をもつコードをまとめたものを集約しサブカテゴリーを形成した。そして、サブカテ

リーの中から研究参加者の体験や思いを代表する主要な概念を抽象し、カテゴリーとして分類した。

分析結果に発言や意図が正しく表されているか、共同研究者間で合意が得られるまで検討し、一貫性、確証性の確保に努めた。また同席した看護師、介護支援専門員に、今回の調査研究結果が他の独居高齢者にも当てはまるかを確認し、適用性の確保に努めた。

(2) 学会、セミナー等での発表

平成 25 年度は、高齢者孤立化問題に関する倫理学、法学、社会学に関する文献を収集し、それぞれの研究者が専門の視点に立って文献研究を開始した。8 月に粟屋司会のもと、船木、旗手、山本が北海道生命倫理研究会夏季セミナーにおいて文献学的研究の中間成果を発表した。平成 26 年 2 月に、粟屋司会のもと、船木、旗手、山本が北海道生命倫理研究会冬季セミナーにおいて文献学的研究の最終成果を発表した。文献学的研究の成果は、北海道生命倫理研究会発行の『北海道生命倫理研究』Vol.2(2014.3.)において論文として収められている。

平成 26 年度は、12 名の研究参加者へのインタビュー調査を滞りなく終えることができた。調査結果を踏まえ、それぞれの研究者が専門の視点に立って分析を進めた。8 月には北海道生命倫理研究会夏季セミナーにおいて、船木は、自立した自由な生活スタイルの享受だけではなく、現実の受容が独居高齢者には重要であることを報告した。旗手は、独居高齢者をサポートする介護保険制度の仕組みについて報告した。10 月に、船木が第 26 回日本生命倫理学会年次大会においてそれまでの研究成果を報告した。会員からは都市と農村との違い、年齢を通じた自立支援のあり方の違いなど貴重な批判的指摘を得ることができた。その後、共同研究者間で逐語録を再度読み返し、さらに分析結果を精査した。その結果、独居高齢者は、自己との関係、及び他者との関係において紆余曲折を経たプロセスを歩んでいるとの重要な認識に至った。前者においては、一人暮らしのとらえ方、楽しみや生きがいを見出すための姿勢、辛い時期を乗り越えるための姿勢、過去を振り返ること、自分の性格を分析することにおいて様々な工夫が認められた。後者においては、支えとなる存在をもつこと、人に必要とされることへの試行錯誤が認められた。

平成 27 年度は、それまでの研究の集大成の年として、研究成果を医療者、研究者及び市民に発信することを目指した。7 月、船木と旗手は北海道生命倫理研究会第 7 回セミナーにおいて、「老いとともに生きるために」という演題で研究報告した。8 月、船木は、釧路国際生命倫理サマースクール&ラウンドテーブル実行委員会主催の市民向け公開シンポジウム「老いを考える 高齢者医療・福祉の問題」を企画し、報告した。11 月、船木は第 12 回札幌市東区北区内科臨床談話会におけ

る招待講演において、「老いを考える—慢性疾患と高齢者医療・福祉」という演題で報告した。11 月、船木は第 21 回日本臨床死生学会大会シンポジウム「遺された人と『悲しみ』を分かち合うために」において、パネリストとして、死別に苦しむ一人暮らし高齢者を支える社会について報告した。11 月、本研究グループは第 27 回日本生命倫理学会年次大会において、シンポジウム「独居高齢者問題に関する哲学、倫理的、社会的、法学的考察」を企画した。粟屋を座長とし、パネリストとして船木は「人間存在の両面としての自立と依存」、山本は「豪雪地域に暮らす高齢者の生活空間と健康」、旗手は「介護保険制度および認知症対策の概要と独居高齢者」という演題で報告した。12 月、医療従事者及び市民の参加を募り、北海道生命倫理研究会主催の公開セミナー「老いとともに生きる社会」を企画した。外部講師として留萌市立病院名誉院長笹川裕に地域医療の現状に関する講演を依頼した。また粟屋を座長、船木、旗手、山本をパネリストとする研究報告「独居高齢者問題を考える」を行った。その後の、パネルディスカッション、フロアディスカッションは活発で有意義なものであった。

(3) 海外での調査、及び学会報告

平成 26 年 7 月、船木はドイツの状況との比較、及びドイツでの高齢者孤立化の状況の調査のため、ドイツを訪問した。ビーレフェルト大学公衆衛生学講座 Kerstin Haemel 教授からは、施設での孤独感、高齢者のボランティアなどの社会参加、老年教育の必要性などの指摘があった。Mobarak Khan 講師への「バングラデッシュの独居高齢者」についてのインタビューを通じて、独居高齢者が安心を得るためには、移動の援助、経済的支援、精神的支援など様々な側面からの援助が必要であるとの認識が得られた。トリーア大学心理学講座 Sigrun-Heide Filipp 教授からは、老年が先の見通しのしにくい時期であること、少数でも親密な人間関係が重要であるといった指摘を得ることができた。平成 27 年 3 月、シカゴでのアメリカエイジング学会において、2 年間の研究成果を報告した。山本はわが国の高齢者の現状・生活・QOL・幸福感について報告するとともに、学会参加を通じて、老年社会学研究の最先端の知識を得ることができた。

平成 27 年度は、26 年度の海外での調査及び学会報告をまとめた。10 月『北海道生命倫理研究』特集号において、山本は、シカゴにおけるアメリカエイジング学会での報告を最新の老年学の観点からまとめた。船木は、ドイツ及びバングラデッシュの独居高齢者の現状に関する調査インタビューの内容を翻訳、及び解説した。

4. 研究成果

仕事がなくなり、家族と離れざるをえない

ような一人暮らしの状況が高齢者が受け入れるに至るには、自己との内面的交渉、及び他者との交渉を繰り返していく中で生み出されるプロセスが必要であると考えられる。自己との関係に関しては、【一人暮らしのとらえ方】、【楽しみや生きがいを見出すための姿勢・行動】、【辛い時期を乗り越えるための姿勢・行動】、【生き抜いてこれた・やり遂げた自信】、【自分に向き合う】というカテゴリがある。一人暮らしを「気を遣わなくていい・自由でいい」と考え、自由な自立した生活に解放感とともに抵抗感なく入っていける高齢者もいれば、それを「何でも自分でやらないといけない」ものとして達成すべき課業ととらえ、そのプロセスに時間と努力を要する高齢者もいる。高齢者は、一人暮らし生活の時間が経過した後にも、不安感を抱えて生活を送っている。そうした中、前向きに「きょう一日を楽しく生きる」と自分に言いかけたり、「退屈しのぎ」をしたり、趣味などを通じて「生きている実感」をもつとしたりすることで、日々の生活を乗り切っている。家族を喪失して突然一人暮らしになったときには、「一日一日を大事に生きる」といった真剣な気持ちをもつことで、そのような時期を乗り越えようとしている。そして、「気持ちの整理をする」ことができるように日記をつけることなどをしながら、辛い気持ちを抑えている。また、過去を振り返りながら、「苦労して今がある」と解釈することで、苦労した経験を現在の生活の肥やしにしたり、「大きな仕事を任せられた」記憶を一人暮らし生活を送るうえで自信にしている高齢者がいる。また、自分の生い立ちから、もともと「孤独には慣れていた」と考え、自分の性格を一人暮らしに順応しやすいものであると分析したり、「あまり物事を深刻に受けとめない」自分の性格が一人暮らし生活を送るうえで役に立っていると考える高齢者もいる。

独居高齢者はこのような自己との内面的交渉だけではなく、一人暮らし生活を日々送っていくうえで、周囲との絶え間ない交渉を試みている。この他者との関係に関しては、【支えとなる存在】と【人に必要される存在であること】というカテゴリがある。独居高齢者は、「ばあちゃん存在」のような自分の身近にいてくれた人をモデルとして模倣したり、気兼ねなく何でも言い合えるような「気心の知れた間柄」に居心地よさを覚えたり、「同じ境遇の人」と理解し合える関係を築いたりしている。また、他者に支えてもらう関係性だけではなく、「人に喜んでもらう」ことに満足感をもったり、「人の役に立ちたい」という気持ちも独居高齢者には認められる。以上のような、自己との交渉、及び他者と交渉を通じて、高齢者がひとり暮らしの状況と折り合いをつけ、前向きに生きていくプロセスを見守るには、独居高齢者を自立した生活に促すだけではなく、その傷つきやすい状況

に理解を示す必要があると考える。

今回の調査研究は、札幌市の都市部と留萌市の中でも非市街地在住の研究参加者を対象にしたものであったが、都市部と農村地域の相違を明らかにするまでには至らなかった。また、独居年数平均も17.2年と長く、独居年数の少ない高齢者の抱える問題を浮き上がらせるものとはならなかった。今後、都市部と農村地域との比較のため調査範囲を拡げることによって、独居高齢者の置かれているそれぞれの地域特有の状況や、独居生活の日が浅い高齢者の状況を検討していくことが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

船本祝【掲載確定】: 独居高齢者を支える社会について哲学・倫理的に考える、地域ケアリング 第18巻第4号, 60-61, 査読なし, 2016.

船本祝【掲載確定】: 弱い立場の人々を支える社会の倫理についての一考察—「強さの倫理」と「弱さの倫理」—, 人体科学, 第25巻第1号, 1-10, 査読あり, 2016.

山本武志(研究報告): 保健医療福祉専門職のコミュニティ・カフェの展開と課題、北海道生命倫理研究, 第4巻, 28-32, 査読なし, 2016.

船本祝(翻訳と解説): 独居高齢者の貧困と依存—バングラデシュの独居高齢者の状況に関する、Mobarak Hossain Khan へのインタビュー—, 北海道生命倫理研究, 特集号, 31-40, 査読なし, 2015.

船本祝(翻訳と解説): 独居高齢者に対する複眼的視点をもつことの必要性—ドイツの独居高齢者の状況に関する、Kerstin Hämel へのインタビュー—, 北海道生命倫理研究, 特集号, 41-51, 査読なし, 2015.

船本祝(翻訳と解説): 独居高齢者問題における重要な着眼点—ドイツの独居高齢者の状況に関する、Sigrun-Heide Filipp へのインタビュー—, 北海道生命倫理研究, 特集号, 52-64, 査読なし, 2015.

船本祝: 哲学の検証と拡張の場としての医療—老いの問題を手がかりとして、哲学年報, 第61号, 31-39, 査読なし, 2015.

山本武志(報告): 米国の高齢社会をささえる American Society on Aging (ASA) の活動—2015 Aging in America Conference に参加して—, 北海道生命倫理研究, 特集号, 29-30, 査読なし, 2015.

船本祝、山本武志、旗手俊彦、粟屋剛: 高齢者の一人暮らしを支えている精神的・社会的状況、北海道生命倫理研究, 第3巻, 13-26, 査読あり, 2015.

船木祝:「人格の内なる人間性」についてのカントの思想形成 「個人」の道徳から「社会」の道徳へ,札幌医科大学 医療人育成センター紀要,第6号,9-16, 査読あり,2015.

船木祝:独居高齢者の社会的・精神的状況に関わる倫理原則の一考察,北海道生命倫理研究,第2巻,査読あり,10-19, 2014.

山本武志:ひとり暮らし高齢者の人生・生活を支える「心理学的弾性概念」の検討,北海道生命倫理研究,第2巻,20-27, 査読あり,2014.

旗手俊彦(資料):終末期医療に関するガイドラインの比較・検討,北海道生命倫理研究,第2巻,29-32,査読なし, 2014.

[学会発表](計35件)

船木祝:自立と依存を支えることについての哲学的考察,北海道生命倫理研究会主催公開セミナー「老いとともに生きる社会」,札幌医科大学(札幌市),2015年12月11日

山本武志:地域の高齢者の活動・交流を促すシステムを考える,北海道生命倫理研究会主催公開セミナー「老いとともに生きる社会」,札幌医科大学(札幌市),2015年12月11日

旗手俊彦:これからの高齢者政策 地域包括ケアシステム導入の課題,北海道生命倫理研究会主催公開セミナー「老いとともに生きる社会」,札幌医科大学(札幌市),2015年12月11日

船木祝:人間存在の両面としての自立と依存,第27回日本生命倫理学会年次大会,シンポジウム「独居高齢者問題に関する哲学、倫理的、社会的、法学的考察」,千葉大学(千葉市),2015年11月29日

山本武志:豪雪地域に暮らす高齢者の生活空間と健康,シンポジウム「独居高齢者問題に関する哲学、倫理的、社会的、法学的考察」,千葉大学(千葉市),2015年11月29日

旗手俊彦:介護保健制度および認知症対策の概要と独居高齢者,シンポジウム「独居高齢者問題に関する哲学、倫理的、社会的、法学的考察」,千葉大学(千葉市),2015年11月29日

船木祝:悲嘆に苦しむ人とともに生きる社会,第21回日本臨床死生学会大会,シンポジウムII「遺された人と『悲しみ』を分かち合うために」,帝京科学大学(東京都足立区),2015年11月15日

船木祝(招待講演):老いを考える～慢性疾患と高齢者医療・福祉,第12回東区北区内科臨床談話会,ホテルオークラ札幌(札幌市),2015年11月5日

Awaya T.: Singularity and Bioethics,

12th International Scientific Conference of the International Society for Clinical Bioethics "Bioethics in the Future: Technicization of the Man or Humanization of the Science?", Sep. 22, 2015, Bol, Croatia

船木祝:独居高齢者とともに生きる社会,第14回一橋哲学フォーラム,一橋大学佐野書院(東京都国立市),2015年9月13日

船木祝(招待講演):高齢化社会と医療・福祉,平成27年度「北海道高等学校学力向上推進事業講演会」,北海道北広島高等学校(北広島市),2015年9月11日

船木祝:独居高齢者問題を考える 自立と依存の共存,釧路国際生命倫理サマースクール&ラウンドテーブル実行委員会主催,市民向け公開シンポジウム「老いを考える 高齢者医療・福祉の問題」,釧路市観光国際交流センター(釧路市),2015年8月29日

粟屋剛:死生論—死に方のコツ,釧路国際生命倫理サマースクール&ラウンドテーブル実行委員会主催,市民向け公開シンポジウム「老いを考える 高齢者医療・福祉の問題」,釧路市観光国際交流センター(釧路市),2015年8月29日

船木祝:人生のプロセスとしての高齢者の一人暮らし,北海道生命倫理研究会第7回セミナー,札幌医科大学(札幌市),2015年7月25日

旗手俊彦:平成27年度介護保険制度改正 地域包括ケアシステムの構築を見据えて,北海道生命倫理研究会第7回セミナー,札幌医科大学(札幌市),2015年7月25日

船木祝(招待講演):安楽死と倫理 プロセスとしての終末期医療,第6回技術者倫理フォーラム～公衆から信頼される技術者になろう～,ホテルポールスター札幌(札幌市),2015年5月22日

Takeshi Yamamoto, Shuku Funaki, Toshihiko Hatate, Tsuyoshi Awaya: Experience and History of Daily Life of the Elderly Living Alone: Interview Survey in Japan (Poster Session), The 2015 Aging in America Conference, Mar. 25, 2015, Hyatt Regency Chicago (America)

船木祝:独居高齢者の不安感・孤独感を軽減する要因,北海道生命倫理研究会第6回セミナー,札幌医科大学(札幌市),2015年2月7日

旗手俊彦:独居高齢者と社会福祉制度,北海道生命倫理研究会第6回セミナー,札幌医科大学(札幌市),2015年2月7日

山本武志:独居高齢者の生活・生存・QOLを考える視点,北海道生命倫理研究会第

- 6 回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2015年2月7日
- 21 Awaya T.: Macro-bioethics: Bioethics Community Without National Borders, 15th Asian Bioethics Conference of the Asian Bioethics Association, 1-3(1) Nov. 2014, Ritsumeikan Asia Pacific University, Beppu, Japan
- 22 粟屋剛（招待講演）：文明論的生命倫理の視点からみた未来的健康長寿社会のユートピアと逆ユートピア，第3回国際先端生物学・医学・工学会議シンポジウム「最先端医療がもたらす国際社会の先駆けとなる健康長寿社会の実現 科学技術の安全活用」，名古屋大学（名古屋市），2015年1月15日
- 23 船木祝、山本武志、旗手俊彦、粟屋剛：都市部及び農村地域における高齢者の孤立化に関する一考察，第26回日本生命倫理学会年次大会，浜松アクトシティコングレスセンタ（浜松市），2014年10月25日
- 24 Awaya T.: Global and Regional Perspectives of Bioethics: proposal for a Bioethics Community Without National Borders, 11th International Scientific Conference of the International Society for Clinical Bioethics, "Bioethics and Medical Ethics: Dialogues of the 21st century", 10-11(10) Oct. 2014, Kazan State Medical University, Kazan, Republic of Tatarstan, Russia
- 25 船木祝：高齢者の在宅における終末期医療の哲学的問題 地域の独居高齢者問題を手がかりとして，第237回関東医学哲学・倫理学会総合部会例会，東洋大学（東京都文京区），2014年9月21日
- 26 船木祝：独居高齢者の精神的・社会的状況に関する哲学・倫理的考察，北海道生命倫理研究夏期セミナー，札幌医科大学（札幌市），2014年8月2日
- 27 旗手俊彦：介護制度の改正，北海道生命倫理研究夏期セミナー，札幌医科大学（札幌市），2014年8月2日
- 28 粟屋剛：高齢者医療に対する問題提起—薬剤過剰投与問題を手がかりとして—，北海道生命倫理研究夏期セミナー，札幌医科大学（札幌市），2014年8月2日
- 29 船木祝：独居高齢者の社会的・精神的状況に関わる倫理原則の一考察，北海道生命倫理研究会冬季セミナー，札幌医科大学（札幌市），2014年2月8日
- 30 山本武志：ひとり暮らし高齢者の生活・生命をささえるもの 独居高齢者研究のレビューとフィールドワークから，北海道生命倫理研究会冬季セミナー，札幌医科大学（札幌市），2014年2月8日
- 31 旗手俊彦：地域包括ケアについて，北海道生命倫理研究会冬季セミナー，札幌医科大学（札幌市），2014年2月8日
- 32 船木祝：哲学の検証と拡張の場としての

医療 老いの問題を手がかりとして，北海道哲学学会・北海道大学哲学会共催シンポジウム「医療はなぜ哲学の問題となるのか」，北海道大学（札幌市），2013年12月14日

- 33 船木祝：独居高齢者の置かれている精神的・社会的状況，北海道生命倫理研究会夏季セミナー，札幌医科大学（札幌市），2013年8月3日
- 34 山本武志：独居高齢者研究の視点：船木科研の課題設定を考える，北海道生命倫理研究会夏季セミナー，札幌医科大学（札幌市），2013年8月3日
- 35 旗手俊彦：在宅高齢者に関する法/制度，北海道生命倫理研究会夏季セミナー，札幌医科大学（札幌市），2013年8月3日

〔図書〕（計5件）

船木祝：村松聡他編『教養としての生命倫理』「9-I-3 各国の終末期医療に関する法制度と現状」(144-145頁)他2項目，丸善出版．225(2016)

船木祝：粟屋剛他編『生命倫理学/医療と法 講義スライドノート第3版』「倫理とは何か」2-11頁執筆，ふくろう出版．207(2016)

粟屋剛他編『生命倫理学/医療と法 講義スライドノート第3版』，ふくろう出版．207(2016)

旗手俊彦（訳書）：前田正一監訳『ヘイスティングス・センターガイドライン 生命維持治療と終末期ケアに関する方針決定』「ケアの引き継ぎに関する指針」116-137頁，金芳堂．342(2016)

船木祝：関東医学哲学・倫理学会編『【新版】医療倫理 Q&A』「Q8-8 医師は患者が望むなら積極的に安楽死をさせてもよいか」(178-179頁)他2項目，太陽出版．280(2013)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船木 祝 (FUNAKI SHUKU)

札幌医科大学・医療人育成センター・准教授
研究者番号：60624921

(2) 研究分担者

旗手俊彦 (HATATE TOSHIHIKO)

札幌医科大学・医療人育成センター・准教授
研究者番号：00198748

山本武志 (YAMAMOTO TAKESHI)

札幌医科大学・医療人育成センター・講師
研究者番号：00364167

粟屋剛 (AWAYA TSUYOSHI)

岡山大学・医歯(薬)学総合研究科・教授
研究者番号：20151194

(3) 連携研究者

なし